英語科学習指導研究委員会

一　テーマ

新学習指導要領に基づく、主体的・対話的で深い学びを実現するための外国語・英語学習のあり方
～小中連携を通して～

二　テーマ設定の理由

小学校、中学校共に新指導要領の実施、そして様々な環境の変化により、試行錯誤する中で新たな実践が日々生まれている。英語科においても同様であり、主体的・対話的で深い学びを実現するために、お互いの考えや気持ちを伝えあう言語活動の工夫や、必要感のある場面設定、指導・支援のあり方について小学校、中学校でそれぞれ実践を重ねていくことが必要である。

小学校ではALTと英語で話したり、デジタル教科書を活用したりすることで、楽しみながら英語と触れ、中学校ではその素地を生かし、必要感のある場面設定や４技能を生かした学習を進めている一方で、授業では英語を話していても、授業外でALTに話しかけられると何と言われているのかわからず戸惑うことがあったり、状況や内容を理解して英語のやり取りができているのか疑問を感じたりすることもある。また、子ども達が学習に対する不安を軽減させるためにも小中連携は重要であるが、依然としてコロナ禍の中、どのような英語学習が行われているのか情報を十分共有できない現状もある。

そこで、今年度は研究内容として次の２点に着目して研究を進めてきた。

①場面・状況・目的に応じた、主体的に互いの考えや気持ちを伝えあう言語活動の工夫
②ICT機器（Chromebook）を活用した授業のあり方

自己表現したり相手意識をもったりして取り組む言語活動を通して、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする姿を育てていくことは、小中学校関係なく共通の課題である。さらに、ICT機器を活用することも欠かせないであろう。これらの共通課題を意識しながら、指導方法やICT機器の活用方法を模索していくことで、より効果的な実践や小中連携のあり方が見えてくるのではないかと考え、本テーマを設定した。

三　研究の経過

第１回委員会　令和４年５月１３日（金）　研究テーマ設定と研究計画の作成　（東塩田小学校）
第２回委員会　令和４年６月２７日（月）　教育課程事前全校研究授業参観　（丸子北小学校）
第３回委員会　令和４年７月８日（金）　教育課程事前全校研究授業参観　（第五中学校）
第４回委員会　令和４年８月８日（月）　教育課程研究協議会　研究協議Ⅱについて　（東塩田小学校）
第５回委員会　令和４年１１月２８日（月）本年度の反省・研究のまとめの作成について　（オンライン）
第６回委員会　令和５年１月１０日（火）　研究発表会リハーサル（オンライン）

四　研究の内容

1　教育課程研究協議会　上田市立丸子北小学校の実践に学ぶ

（1）外国語活動・外国語科研究テーマ

子どもが英語で伝えられる喜びを感じることができる外国語の授業

～子どもが安心して自己表現をできる場の設定のあり方を探る～

（2）学習指導案

①　単元名　　NEW HORIZON Elementary 6

Unit4　Summer Vacations in the World　世界と日本の夏休みの過ごし方を比べよう

②　単元設定の理由

２学期より新しく迎えるALTとの出会いを生かし、ALTに「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」について伝えたい、教えたいという相手意識を単元末まで大事にした単元展開を計画した。

単元初めでは、「夏休みの思い出」を振り返りながら、ALTより児童へMissionを伝える。ALTがどんなことに興味を持っているのか、児童自身がどんなことを伝えたいのかを個人で語らせたり、発表メモを教師と共に考えたりして、発表メモを構想させたい。構想の中で、本単元で学ばせたい英語表現【自分がしたこと（事実)】I went to～. I enjoyed～. I ate～.【自分の感想（思い)】It was～. と既習事項を生かし、自分なりの英語表現ができるよう教師と共に学習を深めていく。個人での発表を基本とするが、担任や仲間の支援が必要な児童がいるため、グループで発表練習をしたり、発表の場を工夫したりすることによって、友だち同士でかかわり合いながら発表に向けて準備を進め、個人発表で自信を持って取り組むことができるようにしたい。

さらに、国際理解を深めるために、教科横断的な単元展開を工夫したい。外国語学習の時間のみではなく、社会、家庭、道徳、総合的な学習の時間等で、柔軟に学習を展開することにより、児童の興味や関心が広がり、学習内容がより深いものになると考える。各教科の授業時数にも十分配慮し、学習内容の精選を図りたい。また、外国語の学習活動でも、調べ学習やまとめ（発表会）の場面でICTを有効に活用することで、児童が表現したいことの一助になると考えている。

このようにして、「英語で表現する必要感がもてる場の設定」や「教科横断的な視点で外国語学習を展開」することで、児童が主体的に深い学びとなる外国語学習ができると考え、本単元を設定した。

③　単元の目標

ALTや友だちに、「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を紹介するために、夏休みに自分のしたことやその感想について、内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、話している。

（CAN-DOリスト：自分のことや身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の「話すこと［発表］」　考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。）

④　本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
＜知識＞I went to　～. I enjoyed ～. I ate ～. It was ～. およびその関連語句などについて理解している。 ＜技能＞夏休みに自分のしたことやその感想について、	ALTや友だちに、「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を紹介するために、夏休みに自分のしたことやその感想について、内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用い	ALTや友だちに、「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を紹介するために、夏休みに自分のしたことやその感想について、内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用い

I went to ～. I enjoyed ～. I ate ～. It was ～. などを用いて、話す技能を身につけている。	て、話している。	て、話そうとしている。

⑤　単元展開の大要（英語科では全８時間　その他教科を含め全 11 時間）

時間	学習活動 ☆他教科のカウント	○他教科等の関連	・指導上の留意点　◎評価の観点	教科書の扱い 教材等
Our Goal：ALT や友だちに「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を発表しよう。				
ALTや新しい表現との出会い③	①担任の「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を聞いたり、自分の「夏休みの思い出」をふり返ったりして、本単元の学習に見通しをもとう。	夏休みの自由研究の作品鑑賞	・新しい ALT との出会いを生かす。 ・ALT より「Please tell me about your summer vacation and Japanese summer culture!」と子どもたちへMissionを出してもらう。 ・相手意識を持って単元終末まで学習意欲が継続できるようにする。	教科書 P34～35 Let’s Sing 「We love summer vacation.」
	☆「日本の夏の過ごし方」について調べよう。 家庭科：1時間	○家庭科６年 すずしく快適に過ごす住まい方	・家庭科の学習で、日本の夏を涼しく過ごすための工夫について学習する。	
	②【自分がしたこと（事実）】I went to ～. I enjoyed ～. I ate ～.【自分の感想（思い）】It was ～. の表現を学習しよう。	○国語 説明文の構成 事実と作者の思いは区別して書くこと。	・Unit3 での学習を想起させ、本単元で学習する表現の相違点に気づかせる。 ・教師や ALT の簡単なやりとりを通して、英語表現に慣れ親しむことができるようにする。 教師：How was your summer vacation? 児童：I went to ～. I enjoyed ～. I ate ～. It was～. 上記のやりとりを繰り返し行う。	教科書 P36～37 Let’s Chant 「Did you enjoy camping?」
	③世界の小学生の夏休みの過ごし方や世界の夏の楽しみを知ろう。	○社会６年 「世界の中の日本」	・夏休みビンゴで表現に慣れる。	教科書 P40～41 夏休みビンゴカード
英語	④⑤「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ご		・教師や ALT のやりとりを通し、英語表現に慣れ、既習事項を生かし	タブレット提示する

表現を身につける②	し方」を各自で発表メモを作ろう。 ☆したこと（went 等)、食べ物(curry and rice 等)、自然(desert 等)、デザート（cake 等)、味（bitter 等）に関する言葉を集めよう。 総合的な学習の時間：1時間	○家庭科５・６年教科書巻末「家庭科の用語 英語ではどういうの？」等	て発表メモを作っていく。 ・机間指導で個の困り感を全体で共有し、様々な表現に触れる機会を作る。 ・必要に応じてタブレットの資料作りを行う。 ・言葉集めは「Picture Dictionary」やタブレットを使用し、たくさんの言葉に親しめるようにする。	実物など 教科書 P38～39 歌・チャンツは適宜取り入れる
ALTや友だちに発表する③	⑥グループ内で発表会をしよう。 ☆発表メモを見直し、さらに工夫したり練習したりしよう。 総合的な学習の時間：1時間 ⑦⑧ALT や友だちに「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を発表しよう。 （発表会は全２時間） 【本時：７時間目】		・グループ内で発表会を行い、互いにアドバイスをし合う。改善点だけでなく、良かった点についても伝え、自信をもつことができるようにする。 ・５つの発表のポイント「ジェスチャー」「スマイル」「ボイス」「アイコンタクト」「雰囲気など（２組のポイント)」は掲示しておきいつでも意識させる。 ・繰り返し練習することで自信がもてるため、発表の練習時間を確保する。	タブレット 提示する実物など

◎ALT や友だちに，「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を紹介するために，夏休みに自分のしたことやその感想について，内容を整理した上で，簡単な語句や基本的な表現を用いて，話している。
※第７・８時の発表の様子や自己評価等の様子より評価する。

◎第１～６時では，記録に残す評価は行わないが，目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても，教師が児童の学習状況を確認する。

⑦　本時案

【主眼】

ALT や友だちに，「自分の夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」について伝えたいという思いをもっている子どもたちが，自分の経験や考えを記したメモを活用したり，友の発表を聞いたりすることを通して，発表内容を整理して，自分がしたこと（事実）と自分の感想（思い）について発表することができる。

【展開】

段階	学習活動	予想される児童の反応	指導・評価	時間
あいさつ／練習	1　ALT とあいさつをする。 2　ALT と担任のモデル会話を聞く。 Today's Goal：ALT や友だちに「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を発表しよう。	・いつものあいさつ。英語の学習が始まるよ。 ・今まで学習してきたから，何を話しているのか分かるよ。 ・緊張するけど，きっと大丈夫。自信をもって発表しよう。 ・ALT に伝わるといいな。	担任：How was your summer vacation? ALT：I went to the mountains. I went camping. I ate curry and rice. It was great. 担任：It was a nice summer vacation. 担任：Did you enjoy a Japanese summer festival? ･･･等，写真や実物等の資料などを提示しながら，本時の発表で目指す姿を想起させるようにする。	8分
発表会をしよう	3　発表したり，聞いたりする。 **1回目** 1～3班　個人発表 4～6班　お客さん 7・8班　お客さん **2回目** 1～3班　お客さん 4～6班　個人発表 7・8班　お客さん **3回目** 1～3班　お客さん 4～6班　お客さん 7・8班　個人発表	・発表メモを確認しよう。 ・Unit3 の発表でも５つのポイントを意識すれば ALT の先生に伝わるはずだ。 ・発表の最後には ALT の先生へ質問するよ。返事が楽しみだ。 ・聞いてくれる相手が反応してくれると，安心できるし，うれしいな。 ・英語で何か返したかったけど。「Nice!」と言って拍手をしてみよう。 ・恥ずかしくてジェスチャーができなかった。次はやるぞ。 ・○さんのように，相手に Can you swim?と聞いてみよう。 ・だんだん慣れてきた。もっと工夫したいな。	・Unit3 の学習の際に決め出した「５つ発表のポイント」について触れる。 ・発表を聞き終わったら，コメントをする。英語で質問や返答ができればよいが，日本語で返答することや拍手でもよいことを伝える。 ・必要に応じて中間指導の時間を取る。 ①児童の姿の良さを取り上げる。 ②児童から課題を出させ全体で解決する。 （例：言いたかったけど，言えなかった等） ③教師から児童に取り入れてほしい表現や内容等について示す。 ・ALT は，得意な児童へは質問を返す。苦手意識のある児童へは，励ましのコメントを返す。 ・担任は，苦手意識のある児童への個別指導を行う。	8分 × 3回

発表をふり返ろう	4　ふり返りカードを書く。(自己評価)	・〇さんの花火の発表が記憶に残っているな。花火の色のことを詳しく発表していた。 ・〇さんは，海で泳いでいて，魚を見つけたというジェスチャーから，様子が伝わったよ。 ・発表は緊張したけど，お客さんが「Nice!」「Great!」と言ってくれた。うれしかった。 ・Unit3の発表の時より，ALTの先生や友だちのことを意識して英語を話そうと思った。何回かやるうちに，自信をもってできた。 ・ALTに日本のよさが伝わった。外国の人にもっと日本の文化を教えたいな。	・本時の活動について，じっくりと振り返る時間を確保する。 【自己評価項目】 ①自分の発表をふり返って （がんばったこと/難しかったこと） ②友だちのコメントでうれしかったこと ③次の発表で生かしたいこと ・自己評価シートの記述を発表させる。 ・担任が学級に広げたい姿を紹介する。発表の姿，聞く（お客さん）姿の両面から取り上げる。 【評価】ALTや友だちに，「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を紹介するために，夏休みに自分のしたことやその感想について，内容を整理した上で，簡単な語句や基本的な表現を用いて，話している。【話すこと〔発表〕】	13分

（３）成果と課題（〇成果　●課題）

〇　２学期から新しく迎えたALTや友だちに、自分の夏の思い出を伝えるという場を設定したことにより、子どもたちが何とかして分かりやすく伝えようという意欲を高めることにつながった。自らの体験や興味のあることを題材に語ることのできる場の設定は、子どもたちが自分の表現をよりよくしていこうとする意欲的な活動を引き出す姿につながっていた。

〇　たくさんの友だちに発表することにより、発表の回数を重ねて表現の仕方がさらに豊かになったり、メモを見ないで自信をもって伝えるようになったりする姿が見られた。言語活動の中で、同一文の表現に繰り返し取り組むことが、成功と修正を重ねながら力を高めていく姿につながっていた。

〇　発表する活動の合間に中間指導を設け、発表における良さの共有や課題の克服につながるような声がけを行ったことにより、子どもたちがそれまでの活動を見返し、新たな表現の工夫をしている姿や、発表への意欲の高まりが感じられる姿が見られた。

〇　ALTが夏の思い出の紹介やスモールトーク等で活動の見通しとなるモデルを提示したことにより、活動の見通しが明確になり、子どもたちが安心して表現する姿につながっていた。何よりも子どもたちが安心して関わり合い、自己表現し合える学級経営が学習の土台になっていた。

●　１時間の学びの中で、子どもたちの学びの視点をより明確にするために「５つの発表ポイント」をより意識させて活用していくとよいのではないか。

●　「Can-Doリストを意識して指導内容を明確にすること」「具体的なコミュニケーションの目的・場面・状況を設定していくこと」「相手意識・目的意識をもとに思考・判断・表現していくこと」などを常に意識しながら授業づくりを行っていく。

２ 教育課程研究協議会 上田市立第五中学校の実践に学ぶ

（１）学習指導案

【学　　年】 中学校第３学年

【単　元　名】 Sunshine English Course３ Program３ A Hot Sport Today （全８時間）

【領域別目標】 「話すこと」[やりとり] イ

【単元の目標】 ALT に（日本に対する）興味をもってもらえるように、日本のスポーツについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができる。

※なお、本単元における「聞くこと」及び「読むこと」、「書くこと」については目標に向けて指導は行うが、本単元内で記録に残す評価は行わない。

（２）本単元に関わる教材研究

① 生徒理解と指導の方向

この学級では、全員での学び合いを大切にしながらこれまで各教科の学習を積み重ねてきた。英語でも、聞く・読む・話す・書く４技能５領域すべての活動に熱心に取り組んでいる。中でも「話すこと」を中心に英語の学習を進めており、多くの生徒が自分の考えや思いなどを英語で表現しようとする姿がある。一方で、２年次後半から自分の考えや思いを「言えた」ことに満足してしまう姿が多く見られるようになってきた。そんな生徒の姿から、個々の話す技能の向上は感じながらも、より生徒が意欲的に学び合うことのできる言語活動はどうあるべきかを追究していきたいと考えた。

＜ポイントを意識して書く・話すＨ生の姿から＞

Sunshine English Course２ Program５ “Work Experience”では、実際に自分が行った職場体験について、教科書の流れに沿って、①どこへ行ったか、②何をしたか、③何を学んだかのポイントを設定し、スライドを作って発表を行った。Ｈ生は体験中にお客さんに会わなかったため、③に迷っていたが、「スタッフさんと話していて、挨拶が一番簡単なコミュニケーションだと実感した」と言い、Chromebook で表現を調べていく姿があった。そして、発表では “I learned greeting is the easiest communication and it is one of the most important things.”という表現をした。また Program６ “Live Life in True Harmony”で行った、「My Great Person」についてレポートを書く活動では、①どんな人物、②具体的に何をした、③その偉人から学べることのポイントを提示すると、登山家の植村直己さんについて、スラスラと文を書く姿があった。

これらのことからポイントを設定することは「書くこと」において、見通しをもって、どのようなことを書けばよいかが明確になるため、大変有効であり、これを話す活動にも生かしていこうと考えた。

振り返ってみるとこれまで行ってきた話す活動におけるポイントは「会話を続ける」や「質問を加える」といったもので、話す内容にフォーカスしていないことが多く、技能的な部分だけを生徒も振り返るようになっていたことに気付いた。

そこで３年次からは、話すポイントを内容面で示し、それを３段階（S/A/B）の「評価基準」として、生徒と教師で共有する活動を取り入れた。Program２ “Good Night、 Sleep Tight”では、「My Good Sleep をペアと伝えあおう」という単元のゴールに向けて、「評価基準」を設定し、ペアで伝えあい、ペアからの評価と自己評価をする活動を行った。（図１）

教師とともに「評価基準」を設定し、それが一言示されるだけでも、生徒たちは話す内容に目を向け、教科書から使えそうな表現を抜き出したり、調べた英語を相手に伝わる表現に変えたりする姿が見られた。評価を伝え合う場面で、ペアからの評価（S）と自己評価（A）が異なったＨ生は「もっと言いたいことがある、まだ話せるのに質問がうまくいかなくて伝えきれなかったからＡだと思う」と振り返った。

このことから「評価基準」を教師と生徒で設定することは、話すことにおいて、技能の向上、内容面での充実につながる言語活動になるのではないかと考えた。

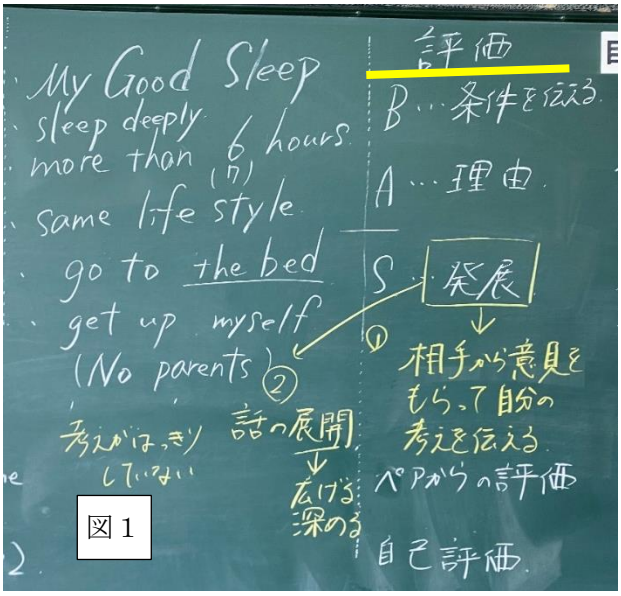


図１

②素材の研究

Sunshine English Course３　Program３　A Hot Sport Today は、バスケットボールというスポーツのアメリカと日本での違いや、誕生の歴史、有名になったエピソードについて書かれている。

第五中学校の ALT は、NBA の熱烈なファンであり、スポーツが大好きと生徒に話している。そこで、本単元では「スポーツ」に焦点を当て、ニューヨーク出身の ALT に日本発祥のスポーツに興味をもってもらうために、自分の選んだスポーツのルールややり方、歴史、人気になったエピソードを伝える活動を位置づけていく。

（３）　【評価規準】話すこと［やりとり］

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
＜知識＞ 動詞・人・ものの語順で書かれた英文の文構造を理解している。 ＜技能＞ 日本のスポーツについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、動詞・人・ものの語順で書かれた英文などの簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする技能を身につけている。	ALT に（日本に対する）興味をもってもらえるように、日本のスポーツについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしている。	ALT に（日本に対する）興味をもってもらえるように、日本のスポーツについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしようとしている。

【主な学習活動と留意点】

前単元からのつながり：① My good sleep を紹介した。(Program2)
：② Small Talk about sleeping （帯活動）
・教科書の内容を自分の生活と比較し、「よい睡眠について」の考えを伝えあった。
・ライフスタイルメモを活用し、睡眠時間（夜）や昼寝についてまとまりのある英文を話した。

時間	学習活動（時間）	留意点
1	1 オリエンテーション（1） ・単元の内容とゴールを知る。 ・ALT と教師のプレゼンテーションを聞き，今ホットなスポーツについて意見交換をする。	**単元の見通しをもつ場面** ・部活動を終えた（続けている）友から各スポーツの魅力を聞いたり、ALT と東京オリンピックや北京オリンピックで心が動いた瞬間を話し合ったりする。
	Program Goal：My Hot Japanese sport を ALT に紹介しよう！	
帯	2～「call 人 モノ」のような語順を使った表現を small talk を通して身につけるようにする。（帯） ・make me happy を使って，自分をハッピーにしてくれるものを理由とともに話したり，named me ○○を使って，自分の名前の由来を話したりする。	**Program 3 の言語材料を身に付けるようにする場面** ・教科書 Scenes の内容から、①What makes you happy? – Playing soccer makes me happy. It is my hot sport. ②My parents named me “○○”. They wanted me to be kind. How about you? のような練習活動を教師と生徒、生徒と生徒で繰り返し行う。
3 4 5 6 7	3 教科書の内容を読んで，分かった内容の伝え方を身につける。（5） ・教科書本文を読み，その内容理解とともに，情報を整理して，自分の選んだスポーツについて， ① どんなスポーツなのか ② 誕生の歴史 ③ 自分の思い を段階ごとに増やして伝えあう。 ＊伝える際には生徒と教師で評価基準（S・A・B）を定める。	**My Hot Japanese Sport 紹介するために必要な表現を身につけるようにする場面** ・教科書本文からバスケットボールの何について書かれているかを考え、それを基に自分の選んだスポーツに置き換えて伝えあう。 ① My hot Japanese sport is “Gateball.”. It is a sport like golf. It is popular for old people in Japan. But now there are some “gateball” tournament in Asia. ② Gateball was created by Suzuki Eiji, a baker in Hokkaido, in 1947. At first, “gateball” was a new sport for children after the war. ③ My grandparents sometimes enjoy playing it. I want to play it with them. I think it is the most important to communicate with someone through playing sports.
8	4 My Hot Japanese sport を ALT へ発表する。	**ALT に向けて紹介をする場面** ALT に興味をもってもらえる発表になったか、評価をしてもらう。

次単元へのつながり： What is the most important for communication?について ALT と意見交換しよう！
・後置修飾を用いて、人やものを紹介する。
・Sign language を学び、コミュニケーションについて、自分の考えを伝えあう。

（４） 本時案

【主　眼】

ALT に自分の選んだ日本のスポーツを紹介するのに必要な表現を知る場面で、ALT が興味をもってくれるポイントに着目し，評価基準を定めたり，評価基準をもとに練習したりすることを通して，相手意識をもって，My Hot Japanese Sport について友とやりとりすることができる。

【本の位置】（全８時間中　第４時）

前時：バスケットボールの歴史について読み取った。

次時：ダニエルからミキに送られたメールを読み取る。

【展　開】

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助　評価	時間	備考
導入／展	1　教師のモデルから本時の見通しをもつ。	ア　先生はゲートボールについて ALT と話しているな。 イ　ゲートボールを作った人やなぜ作ったのかを ALT は質問していたのではないか。	◇教師が ALT とゲートボールの歴史ややり方，魅力についてやりとりする。 ◇会話終了後，生徒たちに ALT がどんな質問をしていたかを問い，Today's Goal を設定する。	8分	
	Today's Goal: ALT が興味をもっていることを意識して My Hot Japanese Sport についてやりとりしよう。				
	2 本時のやりとりの評価基準を教師と生徒で設定する。	ウ　ALT は，どんなスポーツなのかと質問していたからその説明ができればＢ評価でいいかな。 エ　やりかたの説明に歴史も足して，より詳しく言えればＡ評価になると思う。 オ　S 評価は話をより発展させる必要があるから，質問しながら興味を探っていければよさそうだ。 カ　ALT は，私が選んだ「相撲」は知っているかな。知らないならルールも説明して分かりやすくしたいな。	◇Today's Goal に向けて，どんな評価（基準）で話すかを生徒と設定していく。設定していく中で，高評価になるほど ALT への意識が高まるよう問い返す。 ◇ALT がどんな質問を教師にしていたかを問い，ALT の興味に寄せた評価になるように調整する。 ◇全体で評価基準を確認し，教師が実際にＢ･Ａ評価を狙って会話をする。それを生徒に評価をしてもらい，評価がある程度そろうようにする。	12分	Today's Point（教師と生徒で決めた評価の内容）
開	3　本時の評価基準（Ｂ／Ａ／S）を意識してペア練習する。	キ　ALT は相撲を TV で見たことはあると思うから番付について話して，興味をもってほしいな。 ク　紹介するのだから始める方は，Do you know-? がいいかな。Have you ever-? も使えそうだ。 ケ　番付以外にも技や髪形にも触れたら興味をもってもらえそうだ。 コ　ペアが紹介している「剣道」はあまり知らなかったけどおもしそうだな。ALT もきっと興味をもってくれるだろう。 サ　ペアが ALT だと思って，質問を使って話してみよう。	◇Chromebook で自分の選んだスポーツの写真を選んで見せながら話すよう指示を出す。 ◇１回やりとりを終えたところで，始め方や興味をもってもらうために使えそうな表現を全体で共有する。 ◇ALT へ質問する時間を設け，評価を生徒同士で意識するようにし，話す内容を整理できるようにする。 ◇やりとりを聞いて回る中で，ALT への意識を感じるものについて全体で共有し，より高い評価を狙って話せるようにする。	18分	Chromebook
	4　Chromebook でペアの伝えあう姿を記録し，評価しあう。	予想される生徒の発表例① ・Hello. Look at this. This is "sumo". It's traditional Japanese sport. Sumo was created by Nomino Sukune. Do you know sumo's ranking? Sumo players have ranking like Yokozuna, ozeki, sekiwake・・・	◇最後の一回はお互いのやりとりの記録をするよう指示を出す。 ALT への意識をもって、自分の選んだスポーツのやり方や歴史について情報を整理して伝えられたか（活動の観察・Chromebook の記録から）	8分	Chromebook
		シ　ペアからは S 評価をもらったけど自己評価はＡかな。	◇ペアでの会話が終わったところで記録を見て自己評価する場面を設ける。 ◇ALT から会話のコメントをもらう。		
終末	5　本時を振り返り，次時への見通しをもつ。	ス　ALT が知りたいことがなんなのか分かると話す内容が決まってくるな。 セ　早く ALT と話してみたいな。そのためにもっと練習したい。	◇ペアからの評価，自己評価は何か，その理由を記述するよう促す。 ◇どうすればよかったかについて記述している生徒に発表してもらい，次時へつなげる。	4分	Chromebook

【　討議の柱　】

①ALTに向けてMy Hot Japanese Sportを紹介するという場面設定は、生徒が意欲的に言語活動に取り組むうえで有効であったか。

②生徒と教師で評価基準を設定したことは、生徒たちが自分の話す内容について考え、整理して話すという思考力・判断力・表現力の育成とともに、技術向上にもつながっていたか。

（５）成果と課題

討議の柱①について

「スポーツが大好きな」ALTにHot Japanese Sportを紹介するという場面設定は１時間の授業では、分かりづらいが、単元を通して考えると大変有効であったと考えられる。本時までで２回ALTに紹介する場面を設定したが、授業が進むごとにALTが生徒に求める内容が変わってきたからだ。最初にALTが生徒に求めたのは「名前、やりかた」で、次は「ルール、勝ち方」を加え、３回目となる本時は「歴史」であった。ALTがいない場面でも教科書のバスケットボールを例と捉えて、教科書を参考に練習する活動で、生徒たちは「ALTは、これは知らないと思う」「質問をして、確かめてから話を展開しよう」などのつぶやき、自分たちのやりとりを深めていく姿があった。

課題としては、生徒同士のペアで行う際に、「自分」として話すのか、ALTになりきるのかが明確でなかった点があげられる。しかし、ALTになりきることは、実際にはできない。ALTがALTの価値観で使う英語にこそ生徒に響くのだろう。だからこそ本時で生徒が活発にやりとりすることにつながったのではないかと思う。

討議の柱②について

書いたり、話したりするときにポイントを設定することにより、見通しをもって取り組むことに有効であったと考えられる。また、生徒と教師で評価基準を設定しペアを変えながらやり取りすることを行うことで、「相手に伝わる英語」を試行錯誤しながら追求し、友達の評価が生徒の英語の「質」を高めようとするモチベーションになったと思われる。

上田五中に来てから、授業者は「話すこと」を中心に授業を展開してきた。その授業の中で、生徒たちは「伝わった」というより「たくさん話せた」という意識が強くなっていた。もちろん「たくさん話せる」ことがモチベーションになることもあるが、コミュニケーションの観点から考えると相手に伝わっていないのならそれは決してよいとは言えないのではないかと考え、評価基準を教師と生徒で設置する活動を始めた。これが始まると生徒たちは内容面に基準をつけていくため、お互い話される内容にも見通しをもつことができ、活発な言語活動になったと感じる。しかし、一方でペアからS評価をもらっても自己評価はAという生徒が多くいたという課題も見つかった。これを解決するために今から取り入れるべきは「中間指導の充実」ではないかと思う。

生徒の振り返りには「もっと伝えたことがあった」「展開の仕方を考えたが十分にできなかった」といった記述があり、授業後に話を聞くと、「時間制限があるために言いたいことを省略することで自分が納得いかないやりとりになってしまっている」と話した。「中間評価」でよりクリアな見通し伝えたいことが伝わるような表現を抽出し、時間をかけてでも全体で共有することで、生徒全員がより質の高いやりとりができると思う。

本時、中間評価の時間が短くし、やりとりを３回行った。それはきっと授業者の授業観の１つである「話すことを中心に」というほぼ無意識的なものによっているだろう。話せればよいのではなく、内容面に目を向ける＝相手意識をもって話すということを授業者自身が生徒に対して、授業の中で日々見せていく必要があることを強く感じた。

3 教育課程研究協議会 研究協議Ⅱについて

（1） 小学校

今年度の研究協議Ⅱでは、グループごとに外国語活動における情報共有の時間とした。短時間であったが話をする中で、以下のような話題があがった。

① 授業形態と ALT との連携（打ち合わせ等）について
・学年会で打ち合わせをしている。
・ALT が半日勤務で打ち合わせの時間がほとんどとれない。
・２時間目休みなどを利用して、学級担任と ALT で短時間打ち合わせをしている。
・英語専科や ALT が中心となり進めている。（５，６年は専科、３，４年は ALT）
・主に専科の先生と ALT で打ち合わせをしていて、週に１度は必ず ALT と同じ日に出勤できるように予定を調整している。
・民間の指導員が終日いるため、打ち合わせがしやすい。

② Can-do リストについて
・Can-Do リストはこれまであまり見たことがない。
・その Unit でできるようになってほしいことは単元の最初に子どもたちに口頭で伝えている。
・中学では Can―Do リストを作り、教科書会社が示しているものを自校の子どもの実態に合わせて変えていた。単元でつけたい力を明確に示し、意識して授業していた。

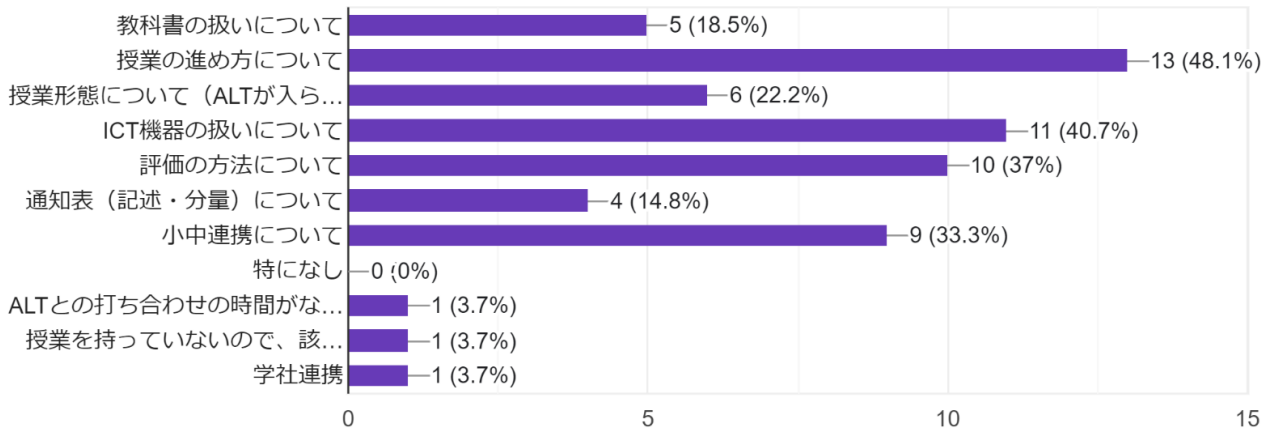
③ 小中連携について
・中学との接続で、ローマ字から離れられずに英語を書く子がいて困ると聞いたがどうすればよいか。
・英単語のスペルは中学で教えるので、小学校でしっかりアルファベットの大文字と小文字を勉強してほしい。

民間の指導員やボランティアを活用したり、専科や ALT が入ったりすることで、より充実した外国語学習ができている学校がある反面、専科や ALT がいるからこそ任せきりになってしまったり、ALT が複数の学校を掛け持ちして勤務していることで打ち合わせの時間をとることができず、授業準備をする上で負担になったりしている学校もあるようだ。それぞれの学校の取り組みにより、かなり差がある現状を感じた。また、Can-Do リストは小学校では浸透している様子があまりみられなかった。小中連携においても、学校ごとにどのような力をつけているのかを知るために、中学校だけでなく小学校でも Can-Do リストの活用が今後重要になってくるであろう。

また、参加した先生方に「外国語学習を進める上で、困っていることや課題としていること」と「ICT 機器の使用状況」についてアンケートをとり、次のような結果を得ることができた。

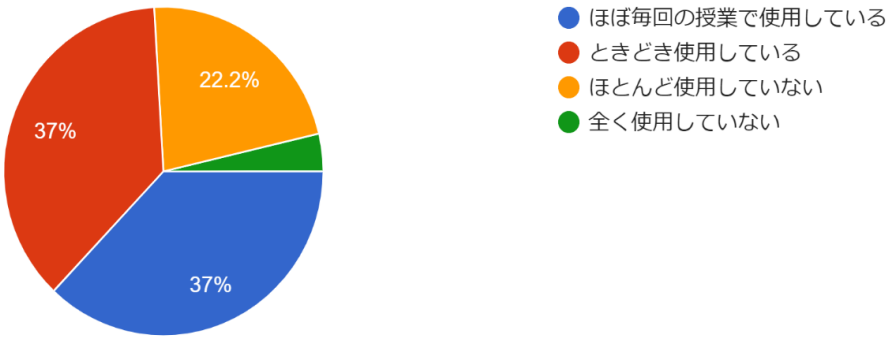
① 外国語学習を進める上で、困っていることや課題としていること

27 件の回答



② ICT 機器（Chromebook など）の使用状況と使用方法

27 件の回答



＜教師用パソコンの使用方法＞

・デジタル教科書（資料提示や発音の練習など）を大型テレビの画面に映し出している

・Zoom での ALT との会話

＜Chromebook の使用方法＞

・スライドの活用（国紹介などのプレゼンテーションやスピーチ）

・スピーチ等で資料を提示するための調べ学習

・学習者用デジタル教科書での word Link 活用

・ジャムボードの活用（インタビュー、クイズ活動など）

・Kahoot!の使用（ALT が作った Kahoot!に取り組む）

・ペア・グループ活動での動画チェック

・ふり返り

①では、アンケートに答えていただいた先生方の半数近くが、授業の進め方について困り感や課題を感じているということがわかった。ALT との打ち合わせの時間が十分取ることができないという話が出たことからも、授業の進め方について不安を感じている先生方が多いと考えられる。また②では、７割を超える先生方が教師用パソコンや Chromebook を用いて授業を行っていることがわかった。スライドや動画の使用方法があげられていることから、英語学習において ICT 機器の活用は、視覚的な効果が大きく、伝えたりふり返ったりする上で有効な手段と言えるだろう。

（２）中学校
今年度は、パフォーマンステストの計画、評価方法について指導主事からお話を頂いた。主にご指導頂いた点は以下の２つである。
①学習指導要領に基づいたパフォーマンステスト実施のためには､各校のCan-Doリストを踏まえて、評価の方法を事前にしっかりと立てること。
②評価基準は、生徒と共に確認し授業で行ったことがパフォーマンステストに反映されるように指導をすること。
①について
自校のCan-Doリストの内容を把握することが必要である。Can-Doリストとは、英語を使って具体的に何ができるのかを指標化したものである。学校ごとに作成しており、学年ごとに到達目標が、五領域ごとに設定されている。その到達目標は、学年度末の生徒の姿である。その五領域の各々の到達目標を逆算しながら、今の目の前の生徒の力を見取り、この単元でこのような力を付けたいという教師の願いと照らし合わせながら、パフォーマンステストの計画を立て、評価基準を設定していくことが必要である。パフォーマンステストの実施には、まず自校のCan-Doリストを把握することから始める。
②について
評価基準は、生徒に指導したことがパフォーマンステストに反映されるようにすることが大切である。その為に、パフォーマンステストの評価基準を作成する際には、実施の時期にもよるが、「単元の目標」「単元の評価基準」を必ず設定しなければならない。「単元の目標」と「単元の評価基準」は一体であり、指導していないことをパフォーマンステストの評価基準として設定はしない。実際に、具体例を用いながら指導主事には、ご指導頂いた。
今回、指導主事にパフォーマンテストの計画、評価方法について大切な２点をご指導頂いた。来年度は、ご指導頂いた２点を取り入れ、各校で実施したパフォーマンステストを持ち寄りながら、具体的なパフォーマンステストの実施方法や設定した「単元の目標」と「評価基準」について情報を交換できるような取り組みを目指していきたい。

五　研究のまとめと成果

コロナ禍の中、教育課程研究協議会がオンラインで行われて２年目となった。今年度は、オンラインでも子ども達の姿がより伝わるような各校の工夫が見られた。そのおかげで、児童や生徒の英語を楽しんでいる様子が十分に伝わってきた。
丸子北小学校の実践では、「ALTや友だちに「夏休みの思い出」や「日本の夏の過ごし方」を発表しよう。」というレッスンゴールを設定し、新しいALTに夏休みの思い出を伝えたいという児童の願いのもと、必要感のある場面設定を設けることで意欲を高め、見通しをもって活動に取り組んでいく実践につながった。児童は自分の夏休みの思い出を、自信をもって発表していた。それは練習できる回数の多さや、Chromebookや道具などが使えることで、伝えたい気持ちがどんどん高まっていくように見られた。さらに、聞いている人のリアクション（相づちや質問）があり、自分の言いたいことが伝わっている実感につながっていたのも、モチベーションが上がる一つの要因であっただろう。また、自分の発表に自信がない児童でも、友達の発表を聞くことで、「自分にもできるかも」と安心につながった場作りや、間違いを恐れず安心して自己表現ができる雰囲気を作り出している学級経営がされていることも感じられる授業であった。
第五中学校の実践では、ALTに「自分が考える日本の魅力的なスポーツを伝える」という単元のゴールを設定し、「どんなことを伝えることができればALTにより日本に興味をもってもらえるか」を友と

互いの発表を聞き合い、教師と生徒がそれに対する評価基準を共に設定することを通して、伝える内容を整理して話すという思考力・判断力・表現力等の育成と共に、英語表現を支える知識・技能面の向上にもつながった。また、「ALT に自分が考える日本の魅力的なスポーツを伝える」という場面の設定は、「生徒が ALT に伝えたい内容を整理して興味をもってもらえるようにしたい」という必要感を生み出すと共に、「友が ALT にどんなスポーツを伝えようとしているのか聞いてみたい」「友がどのような視点でそのスポーツを紹介しようとしているのかを聞き自分の発表に取り入れていきたい」という、友と発表しあうことへの主体的な取り組みにもつながっていった。

２校の実践に共通していることは、「相手意識をもって英語をやりとりする工夫」と、「Chromebook の効果的な活用」である。「相手意識をもって英語をやりとりする工夫」では、単に自己表現をするのではなく、「誰にどのように」という見通しをもった単元展開を行ったことで、ALT や友達に自分の思いを伝えたい願いをもち、まさに主体的に取り組む姿が見られた。

「Chromebook の効果的な活用」では、Chromebook で画像を示すことでより相手に伝わりやすくなったり、自分の発表を撮影し動画に保存し、いつでも自分の発表を見直すことができるようにしたりすることで、次時への思いや願いをより深めることができるようにしていた。

コロナ禍で人との関わりが薄らいでいる中、相手と向き合ってコミュニケーションをとることの素晴らしさや、知恵を絞り、様々なツールを活用することでこのような状況の中でも充実した学びを実現させることができることを２校の実践から学ぶことができた。また、今年度は研究協議Ⅱで先生方の悩みや課題を把握することができた。今後、もっと授業を見合ったり、先生方が学習について情報を共有したりすることができる機会が増え、小中連携を通して互いの学習について理解を深めていけることを願う。そして、それが子ども達の成長につなげられるよう、英語科学習指導研究委員会は今後も研究を進めていきたい。